

海草のはなし⑤(最終回)

藻場と人間生活

アマモやスガモなど海草の藻場が高い生産力によってさまざまな生き物の生活の場となっていることは前回までの連載で紹介しました。近年、環境問題への関心が高まる中で、このように多様な生物が生息する環境を保全していくことの重要性が注目されています。しかし一方で、こうした環境は非常にデリケートで壊れやすい一面も持っているのです。

アマモやスガモなどの海草藻場は、その大部分が人間の生活圏と隣接する岸近くの浅い海にあるため、人間の社会生活によって大きな影響を受けます。たとえば埋め立てや土砂の流入・ゴミの投棄などによって沿岸の浅い海そのものが消失すれば藻場も消えてしまいますし、こうした海草の多くは水の濁りや化学物質による汚染にはたいへん弱いので、環境の悪化の影響も強く受けます。スガモなど北方系の種では温暖化などによる海水温の上昇で影響を受けることも懸念されています。



ホンダワラ類の藻場に隠れる魚たち。
(岩内町・野東。水深2 m)

「ウェットランド」の現在と未来

藻場以外にも干潟や湿原・マングローブ林・サンゴ礁、人工的な環境としては水田など、深さ6mまでの浅い水に覆われた環境(これらの総称として「ウェットランド」という言葉が最近よく使われます)は、さまざまな水産資源の繁殖の場となり、水による陸地の浸食を食い止め、洪水や波浪による被害の危険を減少させ、さらに周辺から流れ込む水の浄化も行なうなど、産業上も環境上も大きな役割を果たしています。しかしその重要性は一般にあまり認識されていなかったため、世界各地でその多くが汚染や開発によって破壊されてきました。日本でも、例えば瀬戸内海では1970年代の前半までに藻場の65%が消失したと言われており、干潟の干拓が原因と考えられる環境の激変で九州・有明海の漁業に大きな影響が出た話は、ニュース等でも大きく報じられたため、ご存じの方も多いかと思えます。

その中で、藻場を含め自然のままの海岸を比較的多く残している北海道の環境は非常に貴重なものと言えるでしょう。そうした貴重な環境を守りつつ、水産資源の増殖などに有効に利用していくことができるかどうか。それが、これからの水産業・開発・そして研究にたずさわる人々にとって、最も重要なテーマの一つとなってくることは間違いありません。(おわり)



スガモ場を泳ぎ回る魚の群れ。
右側がウミタナゴ *Ditrema temmincki*、
左上はキアジ (マアジ *Trachurus japonicus* の沿岸型)。
(泊村・茅沼。水深4 m)